

「鮮やかによみがえる縄文・弥生・古墳時代 ～古代人の心、邪馬台国・巨大古墳の謎」

岡山大学文学部

松木 武彦 准教授

1961 年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。95 年より現職。専門は日本考古学。08 年刊の『列島創世記』（小学館）がサントリー学芸賞を受賞。他にも『人はなぜ戦うのか』『進化考古学の大冒険』（近著）などの著書がある。

みなさんは、縄文や弥生時代に対して、どんなイメージを抱いていることでしょう。縄文は採集や狩猟を主とした遅れた社会、弥生は人々が力を合わせて農耕を行った比較的平和な社会、等々。しかし、考古学の研究からは、これらとはまるで異なった社会が形成されていたことがわかってきました。では、古代日本の本当の姿は？ 古代の人たちはどんな思いを抱いて生活していたのか？ 岡山大学文学部准教授の松木先生に、それらをわかりやすく解説していただきました。講義のなかでも一番の注目は第3章でしょう。古代史最大の謎といわれている『邪馬台国』について、最新の研究成果を交えてお話いただきました。その他の章でも、教科書には載っていない話がいっぱいです。

- 第1章 考古学から見えてくるヒトのおもしろさ
- 第2章 縄文の心、弥生の心
- 第3章 邪馬台国はどこにあったのか？
- 第4章 吉備の巨大古墳と天皇陵からわかること

第1章 考古学から見えてくるヒトのおもしろさ

第1章は、人の心から考古学的遺物を見る、「認知考古学」がテーマ。縄文土器ってなぜ、あんなに不思議な形をしているのでしょうか。一方、弥生土器はともシンプル。それらの違いなどから、縄文や弥生の社会の姿を探ろうという試みです。「認知考古学は」いまとても注目を集めている学問分野で、これによって、古代社会の姿がより明確になるといわれています。

第2章 縄文の心、弥生の心

第1章に続いて、ここでは人々の心を通して、さらに詳しく縄文時代と弥生時代、さらに古墳時代の社会の姿を見ていきます。まず、縄文時代につくられたものを見ていくと「円」のイメージが見えてきます。対して弥生時代は、武力を伴った「支配」のイメージ。また、縄文社会は、私たちが考えている以上に複雑であることもわかってきました。抱いているイメージとずいぶん異なっていることに驚く人も多いでしょう。

第3章 邪馬台国はどこにあったのか？

2009年に奈良県の纏向（まきむく）遺跡周辺で新発見が相次ぎ、再び「邪馬台国」に注目が集まるようになりました。しかし、そもそも邪馬台国の何がわかっていて、何がわからないのか。最大の謎である、邪馬台国の場所は果たしてどこか？ 何か問題となっているのか？ まずは論争を整理したうえで、最新の考古学の成果もを使い、邪馬台国の謎に迫ります。

第4章 吉備の巨大古墳と天皇陵からわかること

最終章は、「邪馬台国」同様、古代史の大きな謎「巨大古墳」について。権力を誇示するためとはいえ、なぜ、あれほどまでに大きなお墓をつくる必要があったのでしょうか。また、巨大古墳は近畿地方だけでなく岡山県にもいくつありますが、それらから何がわかるのでしょうか。松木先生によると、古墳から大和王権の姿も見えるといいます。考古学の奥深さをぜひ味わってください。